

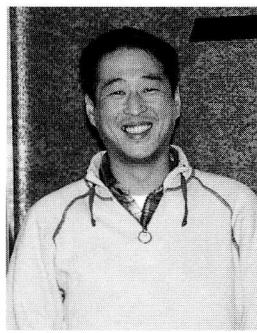
みんなで語る民放史

題字 中川 順

サンテレビ報道部の一週間

彼等はあの大地震をどう伝えたのか

インタビュー・構成 山田 芳雄(OBC)



井田和秀カメラマン

井田和秀、36歳。サンテレビ報道部所属、入社16年目のカメラマン。結婚が遅く、震災当時はまだ子供はいなかった。須磨の山手、神戸グリーンスタジアムにほど近いアパートの2階で、妻との二人暮らしだった。

一日目

1995年1月17日(火曜日)

昨夜は帰宅が遅く、あの瞬間、午前5時46分にはまだぐっすり寝込んでいた。突然襲った衝撃で、思わず

ベッドから飛び起きた。足は思うよう前に進まない。目の前を本棚の書籍が飛んでいく。必死で柱にしがみつく。「おい、大丈夫か」大声で妻に声をかけた。「大丈夫よ」声のする方を見たが、あたりは暗闇で何も見えない。ねぼけた頭でも何が起きたのかは、おぼろげに理解できた。とてつもなくでかい地震だ。とにかく静まるのを待とう。ただそれだけを考えていた。わずか2分ぐらいの時間が、20分にも思えた。

その2分のあいだに、まわりの世界は一変していた。ほとんどの家具は転倒、食器類は散乱し、原型を留めているものは皆無であった。

揺れがとまつてまず思ったのは会社のことだつた。幸い妻にもけがはないようだ。

放送はできるのか!

まつ先にマスター室に飛び込んだ。何と番組は流れているではないか。

通常番組(VTR)だが、二人の技

電車は動いているだろうか、橋は渡れるだろうか、何も分からぬ。妻に後を託し、夢中でガレージから車をひっぱりだした。

周囲がぼつぼつ明るくなってきた。須磨界隈は順調に走れた。しかし長田区に入ると、あちらこちらで煙が上がり、異様な雰囲気となってきた。三宮に近づくにつれ、目に飛び込んできた風景は、かつて見たこともないものに変わってきた。ほとんどの建物は崩壊し、残っているものも、真つすぐり立っているものはない。

神戸大橋のたもとは、液状化現象が起こり車が通れない。やむなくそこで車を乗り捨てる。ただひたすら会社を目指して歩いた。持つて出たポケットラジオが唯一の情報源だ。

7時半に、何とか会社にたどり着けた。玄関前でアナウンサーの藤村と技術の杉田に会う。エレベーターは動いていない。非常階段を駆け上がる。

10階の受付まで来て3人は目を疑つた。応接セットはひっくりかえり、全ての道具は昨日までの態をなしていない。

放送はできるのか!

まつ先にマスター室に飛び込んだ。

とにかく会社に行こう! 家の片

術部員が必死で放送を支えていたのだ。11階の報道部室もさんたんたる有り様だった。とにかくカメラを回さなくてはと、まず局内の惨状を撮り始めた。

8時になつた。報道部長の八田も出勤して臨戦態勢がとられ、街に飛び出すことになった。カメラとテープ、無線機など必要最小限の機材をもつて8時半に会社を出た。その頃オンエアーは、地震の特番に変わっていた。特番と言つても出勤してきた社員をスタジオに連れ込み、出勤途上の模様や家の近くの様子などをアナウンサーとの掛け合いでつないでいくという、急場しのぎのものだった。

会社を一歩出たとたん、またまた我が目を疑つた。目の前の市民病院に次々と救急車が到着し、ストレッチャーで血だらけの患者が運ばれていくではないか。液状化でぬかるんだ道を何とか渡り、夢中でカメラを回し続けた。

三宮の光景は、まさに悲惨という一語につきた。ふだん見慣れたビルが、あるべき所にないのだ。戦争は知らないが、きっと空襲というのもこんなものだろうと思った。頭は真っ白で何をどう撮つたらいいのかも分からぬ。とにかく目に入るものが、あるべき所にないのだ。

火事の勢いは出勤した時よ



を片つ端から撮り始めた。時折余震が襲つてくる。朝の揺れに比べればさほど大きなものではな

いが、余震のたびに傾いたビルから落ちてくるコンクリートの塊から身を守らなければならない。まさに命がけの取材である。

ちょうど一本目のテープがなくなつた頃、自転車に乗つて会社に向かう社員に出会つた。これ幸いとそのテープを彼に託す。おそらくこれがサンテレビとして、初めての現地の画になるはずだ。一刻も早く届けてくれと、祈るような気持ちで後ろ姿を見送つた。

正午ちかく、会社は神戸大橋のたもとに前線基地を設けた。ここまで撮影済みのテープを運べば、30分くらいで報道デスクに届く仕掛けができたのだ。中継車も何とか三宮に出動できたようだ。これで一つ問題が解決できたと胸をなでおろす。

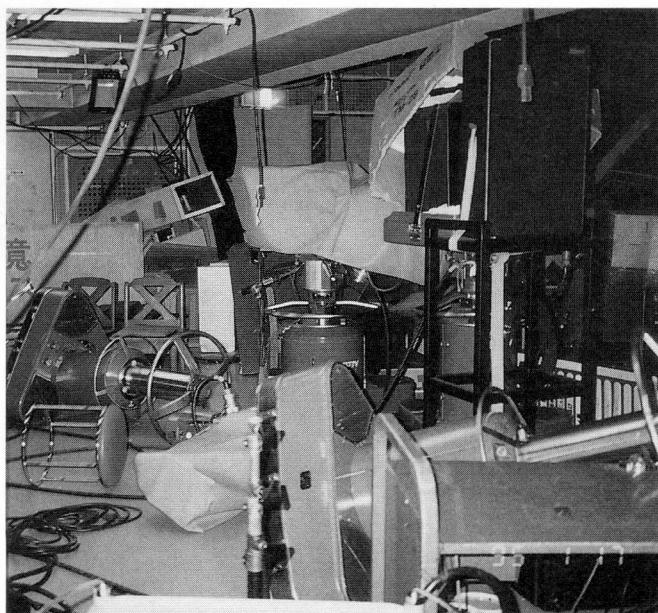
る。消火作業は思うように進んでいないようだ。瓦礫の下敷きになつた人の救出は一刻を争う。「水が出ないぞ」悲痛な叫びがマイクを通じて聞こえてきた。そちらにカメラをふると、横から一人の主婦が「おじいさんがあの柱の下にいるの、助けて」と訴えている。瞬間、カメラを回すべきか、救出に当たるべきか、迷

いが生じた。ともすれば現場の悲惨な雰囲気にのまれ、自分を叱咤し続けた。

「俺は報道マンだ。とにかく冷静になろう!」

何をどう撮つたらいいか考えてくる余裕はなかった。目に飛び込んでくるものを片つ端から撮りまくったが、状況レポートだけは忘れなかつた。

昼間の取材を終え、6時に社に戻



る。疲れがどつと込み上げてきた。休む間もなくスタジオに連れ込まれた。アナウンサーの質問に答える形で、街の様子など見たまま話をす。

テレビ局に勤めていても、自分が画面に出るというのは初めてだつた。

ちょっととした緊張の時間である。スタジオから出るや否や、社の近くのスーパーが食料品を売り出すという情報が入つた。大混乱が起ることで、ではないか。再びカメラをかついで社を出る。

地震発生後すぐ

に、街では食料品、

ペットボトルなど

が底をついたよう

だ。井田本人も家を出るとき妻に「水と食料だけは確保しておけ」といつてきただ。

現場に着いたとき、スーパーの前にはすでに長蛇の列ができていた。何カットかをカメラに収める。

残務整理を終え、家に帰つた時には、日付が変わつていった。食器類の残骸

は片付いていた。妻に感謝。彼女にとつても大変な一日だったにちがいない。

長かつた1月17日が終わつた。

二日目・1月18日(水曜日)

ベッドに入ったが目がさえて、なかなか寝つけない。一日の出来事が走馬灯のように浮かんでは消えていく。長田の火事は消えたのだろうか、あのおじいさんはどうなつただろう(後で聞いた話だが、彼は無事救出されたそうだ)。眠れないままに朝を迎えた。また長い一日になりそうだ。

二、三日は帰れそうもないと思い、身の回りのものをバッグに詰め込んだ。寝袋も持つて出た。8時に会社に入り、特番の制作スタッフに加わる。取材先のリストを頼りに、あちらこちらに電話をかけまくる。被害状況、ライフラインの模様、親戚の安否などを聞く。これらは貴重な情報源になつた。電話の中身をそのままオンエアーしたり、スタジオのキャスターにメモをふつたり、悪戦苦闘の特番は続く。CM部長、デスクを中心に、今後の放送内容についていろいろ論議。やはりサンテレビとしては、「どこに行け

ば水が手にはいるのか」「電気はいつ復旧するのか」「電車はどこからどこまで通っているのか、開通の見通しは?」といった生活情報を中心にすべきだ、で意見がまとまつた。

安否情報は、団体のみ受け付けることにした。個人は「わたしは元気です」というものに限定せざるをえなかつた。とにかく視聴者がサンテレビに何を期待しているか、というのが方針決定のポイントになつた。放送の反応は早かつた。

「わたしの家の隣には、水の出る井戸があります」といった視聴者からFAXも続々入つてくるようになつた。これらも貴重な放送素材となつた。

会議の後は、社内の片付けに専念する。目茶苦茶な室内は、どこから手をつけたらよいのか、見当もつかない。「まあ、ぱつぱつやろうや」みんな、そんな気持ちだつた。

三菱倉庫が火事だ!という情報が夕方飛び込んできた。カメラをかついで、すぐに飛び出す。目的地は神戸埠頭だ。昨日行った六甲アイランドの埠頭も全滅状態だったが、神戸埠頭の状況もひどいものだつた。

「これで神戸もおしまいか」ふとそんな思いが脳裏をよぎつた。

夜、会社に戻り、家から持つてき

たニギリメシで腹ごしらえをする。残務整理をして寝袋にもぐりこむと、さすがにこの日は、バタンキューで寝入つてしまつた。

三日目・1月19日(木曜日)

村山首相が神戸入りするというのを取材に出る。諏訪山小学校の避難所、神戸市民病院などの視察に同行取材。最後に県庁で記者会見し、すぐ帰京した。たつた数時間の滞在で何が分かるというのだろう。政府の対応の遅さやなおざりさが何とも気になつた。



三日間の取材で、一応神戸の隅々にいってしまつたのだろう。感傷に浸るのは禁物と分かっていても、つい気持ちは滅入つてしまつ。『俺があんなに愛した神戸の街はどこにいってしまつたのだろう』。感傷に浸るのは禁物と分かっていても、

「俺があんなに愛した神戸の街はどこにいってしまつたのだろう」。感傷に浸るのは禁物と分かっていても、つい気持ちは滅入つてしまつ。

四日目・1月20日(金曜日)

昨夜も寝袋の中で一夜を過ごす。家のことも気になるので、目が覚めるとすぐに電話をかけてみた。妻の元気な声が聞こえてきたので、まずはホツトする。ラッキーなことに今朝からガスが出始めたという。神戸市としては一番早い復旧だろう。あとは水だ。いつになつたら温かい風呂に入れるのか。

だがもつとひどいところがある筈だ。朝からライフラインの取材に当たる。水道・ガス・電気、まだ大抵の所が復旧していない。周辺の市町村も同じような状況だ。問い合わせても「いま全力でやっています」という答えが返ってくるだけだ。そんな中で、できるだけ正確な情報を視聴者に提供しなければ、と気持ちがあせる。

後日の結論だが、被害が大きかった兵庫県の自治体は、住民への広報が決定的に不足していたため、被災



日はぐつすり眠れそうだ。

五日目・1月21日(土曜日)

さわやかな日覚めだった。こんな気持ちは何日ぶりだろう。朝食をゆっくり味わい、久しぶりに落ち着いた気分で出勤する。

菊水公園で仮設住宅の建設が始まっているので取材に出る。これで避難所暮らしの人も、すこしは救われるだろう。しかし問題は戸数だ。避難所暮らしの人は約23万人、そのうち何人が入居できるのだろう。寒さはまだ続く。

午後からは、フランスから救助犬が来たというので、西宮まで取材に出向く。瓦礫の下の生き埋めの人を捜す能力があるらしい。地震から五日目、果たして何人の人が助かるのか。

けではない。とくに問題だったのは、情報の過疎地帯ができたことだ。神戸、西宮の情報は比較的多くの報道できたが、芦屋、宝塚といった周辺の生活情報はかなりの漏れがあった。このことは、救援物資の支給やボランティアの派遣にも後日影響が出たので、今後に課題を残したといえよう。

夜遅く家へ帰る。妻が熱いうどんを迎えてくれた。やはり家がいい。今

し崇高な何かを感じる。

夕方から編成局長を中心とした会

議が開かれた。いつから通常番組に戻すかが主たる議題であった。現場

取材は大方終わった、あとはライフルインの復旧情報がメインの報道になるが、これはスポーツニュースで解決できる、営業の数字も考えなければならない。論議はあつたが「明日の8時で特番は終了」と決定された。CMを入れた通常放送が、約140時間ぶりに復活することになった。

この140時間の俺たちの放送はこれまでよかつたのだろうか。俺の取材は間違つていなかつたのか、過ぎ去った六日間のいろいろなシーンが頭に浮かんでは消えていく。とにかくやるだけのことはやつた、といいう満足感はあった。時にはカメラマンの枠を越え、アナウンサーの役をこなしたり、報道デスクの役割を果たしたこともある。しかし地域の聴者に100パーセント満足してもらえる放送ができるかといえば、胸をはつてイエスとは言えない。災害時のマニュアル、報道部の態勢、本当の地域密着とは何か、サンテレビとして大きな課題を今後に残したまま、いま特番は終わろうとしている。

六日目・1月22日(日曜日)

久しづりに休みをとった。昼頃

「水が出たわよ」という妻の大声で目が覚めた。「よし風呂だ」と喜び勇んで浴室に駆け込む。

友達に電話をすると、早速手拭片手にやつてきた。風呂の後はビールを飲みながらこの一週間の苦労話ばかりだ。住宅関連の仕事をしている彼には、また違った苦労があつたようだ。「復興事業で儲かるんじやない」とひやかしたら、そんな甘いものじやないと一蹴された。

そして一ヶ月が過ぎた

この一ヶ月間、取材に明け暮れた井田は、仕事が一段落すると今度は、取材される側になつた。『関西ザ・テレビジョン』『放送レポート』『月刊民放』などの記者が、次々と井田を訪れてきた。彼らは一様にサンテレビの活躍を称え、「地方のローカル局がよくここまで頑張つた」と、熱のこもつた記事で紙面を飾つた。

そして震災から一ヶ月目の2月17日、テレビ朝日の『ニュース・ステーション』が、サンテレビのスタジオから震災特集を放送することになった。

キヤスターの久米宏、小宮悦子も早くから神戸入りして、被災地などを取材したあとスタジオに入つた。

井田はこの番組の中で危険を顧みず取材に当たつたカメラマンとして出演、彼の撮った画を中心にして番組が進められた。

反響を呼んだ。井田は一躍時の人となつた。しかしそれはささいな事だ。神戸の復興は、まだ緒についたばかりだ。壊れた建物の解体や撤去はまだ半ばである。インフラの整備、そして何より大切なのは、被災者の生活を守ることである。仮設も増やさなければならぬ。公営住宅の建設、職を失った人々の対策、すべてが遅れ遅れになつている。肝心のサンテレビの復旧もまだ時間がかかるそうだ。

井田はあらためて地元局の使命について考えた。今からが本番である。が目標だが、若干ずれ込む見込み。全ての仮設がなくなる日は、99年末



立ち並ぶ仮設住宅

写真提供 サンテレビ

ラジオ関西

間島光代氏（会員）

1999年11月10日現在
震災による死亡者 4569人
残存仮設住宅戸数 84戸
(ピーク時戸数 32346戸)